「自分を・語る・ことば」——〈個〉に根ざす運動の姿

高 橋 準

一 問題の所在

社会運動は通常、「制度変革」を目指す集合的行為として定義され、運動の社会学的分析も、主にこの側面に力点が注がれている。

たとえば、マリオ・ダイアーニは、集合行為論、資源動員論、政治過程論、「新しい社会運動」論などの各アプローチを総括しながら、社会運動の概念を、(1)インフォーマルな相互作用のネットワーク、(2)共有された信念と連帯、(3)闘争の主題についての集合的行為、(4)非制度的・非ルーチンの行為、という四つの論点に集約させてまとめている。⁽¹⁾ また、栗田宣義は、社会運動を構成する三つの論理として、集合的主体性・異議

申し立て・反制度的行為をあげる。社会運動は、これら三つの論理の積としての「集合行為」と考えられている。⁽²⁾ このような社会運動のとらえ方は、アカデミズムの内だけでなく、その外部でもごく一般的である。しかし、こうしたアプローチのみでは十分に考察できない運動の側面が存在する。それは、一つは運動の担い手の変容にかかわる側面である。特に、今日主流を占めている社会運動、「新しい社会運動」(具体的には、エコロジー運動、女性解放運動・フェミニズム、障害者運動、エスニック・リバイバル運動、など)は、石川准が指摘するように、「自己変革」志向の側面が強い種類の運動である。⁽³⁾ 社会運動参加者の「自己変革」志向の問題は、社会運動を「制度に働きかける集合的行為」として考察するので

はなく、「運動参加者自身への働きかけ」というフレームの中でとらえることによって回答が可能になる。「制度変革」志向以外の社会運動は、これまで「表出的行為」あるいは「社会運動のコンサマトリーな型」という形でとらえられることが多かったが、おそらくそれだけではとらえられない側面がある。それが、「自己変革」志向なのである。

もう一つは、社会運動は、はっきりした形を持った「構造」としてはとらえ切れない、ということである。特に、運動が立ち上がる過程ではっきりと顕在化するこゝとであるが、何が運動であるのか、何が運動の目的であるのか、運動の取る戦略・戦術はどのようなものなのか、といったことは固定されているわけではない。現実には存在している社会運動の境界づけ・目的・戦略等々は、決して自明なものでなく、運動がおかれた環境によって歴史的・社会的に決定されてきたものなのである。ある種の社会運動論が考えているように、運動のスタイルや目的を自明と考えてしまうと、そのことによって、運動が立ち上がる瞬間のダイナミズムと、それがあつた部分では抑圧され、他の部分では回路を与えられてはつきりとし

た形を持つという過程が見落とされてしまう。また同時に、何が運動で何が運動でないかとされているのか、という、「社会運動」のカテゴリーそのものに関する問いも成立不能になってしまう。ここで必要なのは、現在「社会運動」として認識されているものの「外部」にも目を向けて、運動が持っている可能性を探求し、認識の枠組それ自体を問いに付していくことである。

以上のような、「自己変革」志向へのよりいっそうの着目、および、社会運動に関連するさまざまなカテゴリーの問いなおしが、社会運動論の領域で現在必要になってきているように思われる。

本稿は、この二つの論点に向けての試みとして、自己にかかわる社会運動として現れる「自分を・語る・ことば」を取上げ、その特質と意義を考察してみたい。そして、そのことを通じて、社会運動論の中でしばしば欠落してしまう「自己変革」志向の側面に光をあて、加えて、社会運動のカテゴリー問題に関連して、運動の「外」にあると通常されながらも、運動を支え、運動を活性化するものとしての〈原「運動」〉について、若干の議論を試みたい。

二 「自分を・語る・ことば」

ここで「自分を・語る・ことば」とは、最広義には、「自己について言及する言語行為」、そのすべてを意味する。また当然ながらこの言語行為は、何らかの聞き手(それが現前する存在であれ、想定された他者であれ)を必要とする。

したがって、「自分を・語る・ことば」は、もっともプリミティブな形としては、愚痴・ぼやき・口げんかなどの表現形態を取ることもある。ただ、本稿で取り扱う「ことば」は、後に述べるような影響力を持つための特性が、強く、かつ凝縮された形で現れているもの、また(参照が容易であるというきわめてプラクティカルな理由で)比較的入手しやすい「書かれたもの」、すなわち公開された文献・データに限定したい。

次の三つの「ことば」が、本稿の具体的な検討対象である。

a 田中美津、『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リップ論』、田畑書店、一九七二年。(文庫版・河出文庫、一九九二年。本稿の引用頁は文庫版に依拠してい

る。)

b 掛札悠子、『レズビアン』である、ということ』、河出書房新社、一九九二年。

c Cookie、「わたしの「ふぁみにずむ」、一〇六〇、NIFTYServe、生涯学習フォーラム データライブラリ、一九九二—一九九三年。(引用は連載の回数で示す。)

それぞれについて若干のコメントを加えておく。

aは、日本のウーマンリップ運動(以下単に「リップ運動」)の中で書かれたもの。田中美津自身は、東京の女性たちの活動の一つの拠点ともなっていた「新宿リップセンター」の中心メンバーであり、運動の中で重要な位置を占めていた。その彼女が一九七二年に発表した『いのちの女たちへ』は、数多くの女性たちに読まれ、今回数上げる三つの「ことば」のなかでも、もっとも大きな社会的影響を持ったものであり、文庫版が出た今日も女性を中心に広い読者を得ている。⁽⁴⁾

bの著者・掛札悠子は女性の同性愛者(レズビアン)であり、それを知人・世間に向かって「公言」(coming out)する「過程」でこの「ことば」は書かれている。a

が、一九六〇年代末の学園闘争・市民運動の影響を色濃く残し（田中自身、ベトナム平和運動などに深く関与した経歴を持つ）、用語・語調などにも影響が見られるのに対し、bはかなり文章の調子が異なる。「運動」というイメージとは多少離れた、静謐な印象を与える文章である。

cは、a・bとは性質が異なるため、やや詳しく述べておく必要があるだろう。これは商業コンピュータ通信ネットワークであるNIFTY-Serverの「現代思想フォーラム」の一会議室上で主に発表されたもので、通常の出版物ではない。ちなみに、筆者名「Cookie」は本名ではなく、ネットワーク上での筆名（ハンドル名と呼ばれる）である。

コンピュータ通信というメディアの性質上、誰でも読むことのできる種類のデータではないが、その影響力は必ずしも過小評価できない。このフォーラムには、発表当時三千人台から四千人台の会員があり、さらに発表された会議室（「フェミニズムの部屋」のちに「feminism (human & sexuality)」）をその全てがアクセスしていたわけではないことは考慮しても、常時数百人の

目には触れたであろう。⁽⁶⁾

また、いく人かのフォーラムの会員は、彼女の発言に對する返事 (response) を出しており、それに対する彼女の答えもまた発せられている。したがって、この「ことば」に関しては、読み手とのより相互作用的な関係の中で書かれており、また、一度に発表されているのではなく、書かれたその都度の発表になっていることに注意しておく必要がある。これは、「自分を・語る」過程にさまざまなに他者がかかわっていることが、よりはっきりと見えている例である。

したがってcの例は、会話（特にコンシャスネス・レイジングなどの、しばしば運動の一環として行われる対話）の中での「自分を・語る・ことば」を考えるための手がかりにもなるだろう。

なお、三つの例はいずれもフェミニズムとその周辺に位置している。今回は、「ことば」の分野を、このように比較的近接した領域に設定して考察を行ないたい。

これらの「自分を・語る・ことば」の特徴を最初にとめてみよう。

(1) 「自己」を参照枠(Frame of reference)とする

「自分を・語る・ことば」は、一般的な真理を求めめるのではなく、自分自身を判断の参照枠として、選択を行なう。あるいは、普遍的な言語で語られているものを、自分自身を参照して問題構成を問いなおす。ここに「自分を・語る」意味の中心が置かれている。抽象的な「理論」をそのものとして語るのではなく、自分の生という「実践」を通じて、それを語ろうとする。一九七〇年代初めのラディカル・フェミニズムの運動の中で「個人的なことは政治的である(The personal is political)」というスローガンが存在したが、このような形で自己を参照枠とすることは、それを踏まえながら、「政治的なものを個人化していく(Personalizing the political)」過程であると考えることができるとする。

自己を参照枠とすることは、自己を閉じてしまうことではなく、むしろ自己を通じて世界を見ていくこと、あるいは、常に自己を振り返りつつ理論の一般性を問いなおしてゆくことなのである。

この点について、上野千鶴子はaの著者との対談の中でこのように表現している。「自分の穴を掘ったら世界

に通じるって信じることね。」⁽⁶⁾

bでは、以下のような再認識として、この問題が語られる。「さまざまなことを書いたことで、ようやく、私はどうやって『レズビアンとはだれか』と問うことをやめ、『私がレズビアンのひとつの現実である』と言うにいたったかが自分のなかではっきりした。もうひとつの言いかたをすれば、この一年あまりの間にさまざまなことを書いたことで最終的に私は『レズビアンとはだれか』を問うことをやめ、『私がレズビアンのひとつの現実である』ということに気づき、それを表明する手段を手に入れたのだ。」⁽⁷⁾

またcにおいては、「フェミニズム」ではなく「ふえみにずむ」と銘打つ、そのところに、自己を参照枠としていく姿勢が表明されている。「そう……去年の今頃、わたしは『ふえみにすと』と名乗っていたわけ。誤変換じゃない。ひらがなの『ふえみにすと』! かつてのウーマン・リブの女性たちが、最近になって『りぶ』もしくは『りぶりあん』などと名乗るのと同様に、わたしも『フェミニズム』に『わたし』を込めたかった。自分の足で立ち自分の直観と思いに頼る『ふえみにすと』

でありたいと思っていた。⁽⁸⁾

(2) 自己の内部の亀裂・他者性を見る

「自分を・語る・ことば」は、自己が一枚岩的な存在であるとは考えない。自己が矛盾に満ちた存在であること、自己の内部の他者性、これらを認識する。⁽⁹⁾

a である「とり乱し」などは、まさにこれである。

「リップを運動化して間もない頃、それまであぐらをかいていたくせに、好きな男が入ってくる気配を察して、それを正座に変えてしまったことがあった。(……) 楽でかいていたあぐらを正座に変えてしまった裏には、男から、女らしいと思われたいあたしがまぎれもなくいたのだ。(……) その時のあたしの本音とは、あぐらを正座に変えてしまった、そのとり乱しの中にある。」「あぐらから正座に変えた、そのとり乱しの中にあるあたしの本音とは(女らしさ)を否定するあたしと、男は女らしい女が好きなのだ、というその昔叩き込まれた思い込みが消しがたくあるあたしの、その二人のあたしがつくる『現在』に他ならない。⁽¹⁰⁾」「加害者の論理」が問題なのは、それが被抑圧者としての自己を切り捨てさせてしまうからだ。抑圧者であり、被抑圧者でもあるという矛盾の中

に、闘いの弁証法が息づいているのに、抑圧者一辺倒で塗り固め、たてまえでしかない革命の大義を使命感をもって奉らせてしまうところに、『加害者の論理』の犯罪性があるのだ。⁽¹¹⁾

また、cにおいては、このように自覚されている。

「善かれ悪しかれ、社会と自分の矛盾、信念と実態の矛盾を抱えたままで生きていくしかない。矛盾を抱えた(わたし)をまるごと受け入れていくのだ。」⁽¹²⁾

(3) 自己の肯定

「自分を・語る・ことば」は自己を否定しない。これももっとも強く主張されているのはaの中である。田中は、「自己否定」を要求した一九六〇年代後半の学園闘争・新左翼運動に対する批判から、この主張を打ち出してゆく。つまり、自分が抑圧者・管理者の側に立つ存在であることを意識的・無意識的に察知した「エリート」たちが、そうした自分の存在を拒絶するものとして、「自己否定の論理」をとらえるのだ。そして、では、「女」無価値な存在」としての自分を日々意識しつつ生きている自分は、「これ以上なにを否定すりゃいいというのだ！」というのが、田中の生の声。開き直りである。

「ああ、東大生というのは、自己肯定しえるものをもっているから、あんなにラディカルに、『自己否定の論理』を打ち出せたのだなあ、と今さらながら思い当たったというわけだ。」⁽¹³⁾

これに対して、後の世代である掛札は、より素朴な形で肯定を行なっている。「結局、『レズビアンである』と言うことは、『今、自分が親密な関係をつくっている(つくりようとしている)のは女性である○○さんだ』という事実を示すひとつの方法ではない。」⁽¹⁴⁾ここで彼女の気づきは、「私が私であるのは当然だ。それでなぜいけないのか。」という、きわめて素朴ではあるが根本的な自己肯定である。

cでは、アイデンティティ危機ともいえるような、自己の存在が危うい状況において、筆者が自己を肯定していく場面が印象的に語られる。「わたしは泣きながら叫んだ。『フェミニズムを捨てろ』というのは、過去のわたしを否定しろということです。今のわたしは過去があったのわたしです。これまで蓄積してきた「自分」を捨てて、世の中に適応して楽になろうとも、わたしは「わたし」を生きることにはならない! それは嫌です!」⁽¹⁵⁾

(4) 「傷み」を語る

「自分を・語る・ことば」の持つ力は、主にこの点に由来する。自分の抱えている「傷み」(田中美津は「己れの闇」⁽¹⁶⁾という)を「語る」ことで、「ことば」は力を持ち、そして社会運動としての意味を持つようになる。

a、cでは「女であることの生きにくさ」が、離婚、中絶などの自分の経験やジェンダーの形成などへの言及を通じて語られる。bでは、異性愛中心のこの社会において、同性愛者であること、特に女性の同性愛者であることそのものが、まさに「傷み」であると言える。

もっとも、「傷み」を語ることは、その「痛み」(苦痛)を語ることに等しいわけではない。「痛み」の語りはえてして「愚痴」に流れていくし、それほど大きな力を持つとも思われない。あるいは田中美津が言うように、「いま痛い人間は、そもそも人にわかりやすく話してあげる余裕などもち合わせてはいない」⁽¹⁷⁾ので、「痛み」はこのような形では語られないということもある。むしろ、ここにあげた「ことば」の中では、「痛みの克服」の過程が語られていることに注意したい。語り手はすでに「痛み」を何らかの形で克服しているか、あるいは克服

の過程の中に既にあるのである。

これら四つが、「自分を・語る・ことば」が力を持つための条件でもある。本稿で取上げている三つの「ことば」は、四つの特徴をきわめて凝縮した形で表していると言える。

もっとも、一般の「自分を・語る・ことば」においては、これほどの密度や深さはないかもしれない。しかしながら、拡散した形であれ、浅薄なものであれ、さまざま「ことば」は、そのどこかでこれらの特性を示す部分を持っているものと考えることができる。その限りにおいて、あらゆる「自分を・語る・ことば」は、社会運動として意義づけられ得るのである。

三 社会運動としての意味

(1) 「自分を・語る・ことば」は、自己を対象とする社会運動である。

まず、「自分を・語る・ことば」は、それ自身が自己を対象とする、すなわち「自己変革」を志向する社会運動であるという側面を持つ。自己の内部の亀裂や他者性

を発見するという作業は、自己の成立を通時的・共時的に理解し、語りを通して自己を再構築する作業であると見えよう。自己は、即自的に存在するものとしてだけでなく、「自分を・語る」過程の中で客観視することを通じて再構築されるものでもある。この作業を通して、自己は自分自身によって再認識され、新しく作りなおされる。

ここで何が生じるかを、もう少し詳しくたどってみよう。

①「自分を・語る」過程の中で、対象となるのは、これまで社会的環境の中で形成されてきた即自的な自己である。「自分を・語る」過程の中で、まず、通常は必ずしも認識されていない自己内部の亀裂・矛盾・他者性が認識される。同時に、あるいはそれに続いて、自己の肯定が行われるが、ここで上で認識された自己内部の矛盾や亀裂などは、否定されずに（否定されると、自己は矛盾のない、首尾一貫した存在として再び認識しなおされることになる）そのまま引き受けられる。

つまり、社会関係の中で与えられたアイデンティティを自明のものとしてそこに安住してしまうことなく、自

らの存在そのものを問いに付すことが行われているのである。ミシェル・フーコーが指摘しているように、現代社会における支配の形式は、個々人を自分のアイデンティティに強制的につなぎとめることを特徴としている。

「この権力形式は、個人を類別する日常生活に直接関わり、個人の個性を刻印し、アイデンティティを与え、自分にもまた他人からもそれと認められなければならない真理の法を強いる。」⁽¹⁸⁾彼がここで示唆しているのは、支配は、外部から個々人の行為を拘束し、その変更を強制するようなあり方(いわゆる権力の問題)だけでなく、個々人の内面を特定の形で構成するようなあり方でも働いているということである。言い換えるならば、「自己との関係」のあり方が、個々人の生を拘束しているという側面が指摘されているのである。⁽¹⁹⁾

「自分を・語る・ことば」は、その内面構成のあり方自体、「自己との関係」そのものを問題化するものである。すなわち、「自分を・語る・ことば」は「自己変革」志向の社会運動であるが、この時の「変革」の意味は、「自分を別な存在に変えてしまう」(そのためには、おそらく今の自己の存在を全否定する「自己否定」の作業が

必要であろう) ことではなく、むしろ自分自身への視線の性質を変えることであると言えよう。ここでは「自分を・語る・ことば」は、「自己との関係」の刷新、自己の再認識・再構築を目指そうとするものとしての、「自己変革」志向の社会運動である。

②さらにこのことが重要なのは、内部の亀裂・矛盾の認識を通じて、自己が、総体として何らかの差別や害の受け手(以下、単に「被害者」として存在するわけではなく、また総体として何らかの差別や害の加え手(以下「加害者」としても存在するものではない、ととらえられているからでもある。「自分を・語る」ことは、このように、ある人間が完全なる被害者でも完全なる加害者でもないことを明らかにする。逆に言うならば、ある一人の人間は、ある部分で加害者であり同時に別の部分で被害者でもあることになる。⁽²⁰⁾

「自己否定」という思考は、加害者としての自己の存在を全体として放棄して、それによって被害者の立場に立とう、とするものである。これに対して、「自分を・語る・ことば」においては、「自己肯定」の立場が取られる。それは、ある意味では、自らに対する非常に厳し

い態度でもある。それは、一つには、「自己否定」という一種の免罪符によって、自分の「加害者性」を改めて問いに付すことなく片付けてしまわないということであり、もう一つには、田中美津が言うように、「己れの闇は己れの闇。被差別部落民の、在日朝鮮人の、百姓の闇を、あたしたちは共有できない。しかし、己れの闇に固執する中で、その共有できない闇の、共有できない重さの、『共有できない』ということ己れにどこまでも背負っていく⁽²¹⁾」ことを、自分の「傷み」を語ることを通じて明らかにするのであるといえる。つまり、人の「傷み」は「わからない」ということを認めていく、ということである。

「自分を・語る・ことば」の場合には、これが逆説的に意味を持つことになる。確かに、「傷み」を語ることは、単なるカタルシス、あるいは愚痴や感情の吐露で終わってしまいかねない側面を持っている。しかし、そこにとどまらず、自己の内部の「加害者性」と「被害者性」をともしに引き受け、他者との了解の不可能性を認識しながら、それでもなお語り、そして当然ながらその語りに耳を傾ける他者が存在するならば、自己と他者が衝

突し、なんらかの共通の尺度、すなわち社会性が生まれる可能性が存在するのだ。

そして、そこで生じる新しい社会性は、当然ながら社会から与えられたものとは異なった尺度である。その尺度は、社会的に流通している一般的カテゴリー（女／男、「障害者／健康者」、等）とは、たとえ同じ言葉で表現されていても異なった意味を持つ、〈個〉に根ざした、個人性の文脈で語られるものであろう。自己と他者との関係も、この共通の尺度にもとづいて取り結ばれるようになる。ここでは、「自分を語ることば」は、与えられた社会的カテゴリーを解体・構築しつつ、新しく他者との関係を構築しなおしていくという、自己と他者との関係の変革としての社会運動であるという側面を持つ⁽²²⁾。

(2) 「自分を・語る・ことば」は、社会運動と運動の外部との接点に位置している。

「自分を・語る・ことば」は、そのすべてが社会運動として認められるわけではない。「自分を・語る・ことば」は、ここで取上げたような、凝縮された形を取るとは限らない、と先に述べた。凝縮されたものでない、拡散した形の「自分を・語る・ことば」は、日常的な会話

口喧嘩の中の言葉、日記の記述、などの中に現れるだろう。これらは通常は、もちろん「社会運動」とは認められていないし、また(1)で考えたような意味の「自己変革」志向にもつながりにくい。それは、密度が小さいために、自己の再認識、関係の再考や再構築などが、言説の中で曖昧になってしまうためである。

しかし、このような形態の「自分を・語る・ことば」も、社会運動とまったく切れた存在とはいえない。なぜならば、それらは社会運動を通時的・共時的に支える役割を果たしている側面があると考えられるからである。

社会運動の発生には、通常、主体内部での社会的不満・相対的剝奪の蓄積が前提とされる。あるいは、さまざまな組織化されない抗議行動などが、運動の形成に先立って想定される。⁽²³⁾こうした不満の蓄積・未組織の抗議行動(特に散発的なもの)もまた、運動とは認められることはない。しかしながら、それらは運動の形成にとつては不可欠なものであるといえる。「自分を・語る・ことば」も、極端に個人的な文脈で、しかも、本稿でとりあつかったような凝縮された形態をとらない多くの場合には、散発的で未組織な形で行われる行為である。だが、

関連する論点を目的に掲げる社会運動(本稿の三つの例では、女性解放運動・フェミニズムや同性愛者の運動)にとつては、こうした行為の蓄積が必須ともいえるのである。⁽²⁴⁾

また、通時的にだけでなく、運動が進行する中で共時的にも、運動の内部には位置づけられないが、運動を支えているこのような行為は存在し、社会運動にとって重要な役割を果たしている。これらの行為は、組織的に動員されたものではないかも知れないが、運動を支え、その活性化に貢献しているといえる。⁽²⁵⁾こうした、「明確な目標を持たずかつ未組織のままであり、社会運動の内部には位置づけられないが、運動のイシューに関連している、運動が形成・維持・発展する上で重要な役割を果たす個別的・集合的な行為」を、ここでは〈原一運動〉と呼ぼう。「自分を・語る・ことば」は、こうした〈原一運動〉の一つの形態でもある。

この〈原一運動〉は単に運動の下ざさえをしているだけでなく、運動の再構成の源泉でもある。ある社会運動は、運動としての同一性を、当初から・常に、確立しているわけではなく、同一性が生じてくる過程を、通時的

にも共時的も必ず持っている（ある社会運動が形成されてくる通時的過程として、あるいは、運動が進行する共時的な過程の中のさまざまな転換点や危機において）。

その過程においては、運動と〈原一運動〉のはっきりとした区別はない。運動が形成されてくるとどこかの時点で、この二つは区分される。ある場合は、〈原一運動〉は「運動にあらざるもの」として、運動の側から切り捨てられる。しかし、この時でも、今述べたように〈原一運動〉は、運動そのものから分離してしまうわけではない。

「自分を・語る・ことば」などの〈原一運動〉は、適切な回路が存在すれば（註(25)を参照）、運動の内部へ回収されてその再構成の契機となるだろう。運動の新しいイシュー、運動への新しい参加者、運動の新しい形態、などは、運動が立ち上がる瞬間だけでなく、運動が進行する過程においても、こうして運動の内部へ貫入し、運動を再構成する可能性が開かれるのである。(26)

四 結語

「自分を・語る・ことば」は、もちろん可能性だけでなく問題点をもあわせ持っている。

その問題点の多くは、まさに「自分を・語る・ことば」が力を持つ点の裏返しである。すなわち、(1) 特殊個別的な文脈の極限で語られるために、状況を共有しない聴き手にとっては理解が困難であること、場合によっては強い反発を招くこと、(2) 個人的経験に基盤を置いたために、集合行為としての社会運動に必須な共有された価値がそこからは形成されにくいこと、などである。(27)

江原由美子は、すでにリブ運動についての一文中において、「生き方」のレヴェルの解放論と、社会思想、社会変革理論としての解放論は、異なる次元の問題である、この2つのレヴェルの充分な自覚の不在が、リブの論理をしばしば空転させてしまった。(28)とし、また、「たしかに、『個人的な経験』は運動の原点として必要ではある。しかしそれを運動の中で行動計画・闘争目標と結びつけることなしに、個人的な関係の平面で充足させてしまえば、話し合いの場は単なる『おしゃべり』の場になってしまふ。」という批判を加えている。(29)

しかし、右のようにこれを、「自己変革」志向の社会運動として、また、社会運動の形成・維持・発展にとって重要な役割を果たす〈原一運動〉としてとらえること

によって、その意義と限界を明確にすることができらう。つまり、(1)「自分を・語る・ことば」は「自己変革」志向の運動として重要であるが、「制度変革」志向の運動ではあり得ない(あるいは「制度変革」へ結びつけるには非常に困難が伴う)、ということ、すなわちそれはあくまで社会運動の両輪のうちの一つでしかないこと、(2)「自分を・語る・ことば」は、「(原一運動)」として運動の形成・維持・活性化にとって必須の機能を果たしているということ、ただしそれは、拡散した形であらわれやすく、場合によっては何らかの手段によって回路づけることが必要であること、この二点に集約できる。

したがって、「自分を・語る・ことば」は、手放しでそれに飛びつくことができるものではないし、飛びついてしまっただけで終わりにしてしまってもよいものでもない。しかし、さまざまな文脈で社会運動の一種の閉塞状況が一部で問題にされている現在、抽象的で運動の担い手の身体から距離のある理論ではなく、常に(顕在的・潜在的な)運動の担い手の生活と実感に近いところに基盤を持った社会運動の実践と理論が必要だといえるのではないだろうか。⁽³⁾

「自分を・語る・ことば」はそのための一つの糸口であり、さらに「自分を・語る・ことば」について、既成の「学問」の言葉を可能な限り使って語ろうとすること——本稿が試みるこのこともまた、そのための手がかりであろう。

(1) Diani, M., "The Concept of Social Movement", *The Sociological Review*, 38-1, 1992, pp. 1-25.

(2) 栗田宣義、「社会運動を構成する三つの論理」、『社会運動の計量社会学的分析——なぜ抗議するのか』、日本評論社、一九九三年、に所収、第6章。

(3) 石川准、「社会運動の戦略的ディレンマ」、『社会学評論』、第三九巻第二号、一九八八年、一五三—一六七頁。

(4) 日本のウーマンシップ運動および田中美津についてのより詳しい分析は、江原由美子、「リップ運動の軌跡」、および「ウーマンシップとは何だったのか」(ともに、江原、「女性解放という思想」、勁草書房、一九八五年、に所収)を参照。また、三木草子・佐伯洋子・溝口明代編、『資料 日本ウーマン・リップ史I 一九六九—一九七二』、京都、松香堂、一九九二年、は資料として貴重なものである。

(5) ちなみに、非公式の情報ではあるが、この会議室は、NIFTY-Serveの社会・教育・研究系のフォーラムの中では、飛びぬけた回数・時間のアクセスがあったと聞く。

- (6) 上野千鶴子・田中美津、『美津と千鶴子のこんとん
んからり』木犀社、一九八七年、二二八頁。
- (7) 掛札、前掲書、二一五頁。
- (8) Cookie、一。
- (9) こうしたアイデンティティの多数性を、筆者は「ポリ・アイデンティティ poly-identity」と呼んでいる。なお、この概念についてはジュリア・クリステヴァの「ポリー・ロージュ polylogue」の概念を下敷きにしてゐる。Kristeva, J., *Polylogue*, Paris, Seuil, 1977 (足立・沢崎・西川ほか訳、『ポリー・ロージュ』白水社、一九八六年)を参照。
- (10) 田中、前掲書、六八頁。
- (11) 同書、二四二頁。
- (12) Cookie、一八。
- (13) 田中、前掲書、五一頁。
- (14) 掛札、前掲書、二二頁。
- (15) Cookie、五一。
- (16) 田中、前掲書、八五頁。
- (17) 田中、前掲書、二八〇頁。
- (18) Foucault, M., "The Subject and Power", in Dreyfus, H. L. and Rabinow, P., *Michel Foucault: Beyond Structuralism and Hermeneutics*, Harvester Press, Sussex, 1982, p. 212 (瀧美和久訳「主体と権力」、『思想』一九八四年四月号、一三八頁)。
- (19) 「自己との関係」にひびくは、Foucault, M., *L'usage des plastris* (Volume 2 de *Histoire de la sexualité*), Paris, Gallimard, 1984 (田村俶訳、『性の歴史II 快楽の活用』新潮社、一九八六年)、「および、Foucault, M., *Le souci de soi* (Volume 3 de *Histoire de la sexualité*), Paris, Gallimard, 1984 (田村俶訳、『性の歴史III 自己との配慮』新潮社、一九八七年)を参照。また、高橋準、『新中間層の再生産戦略——一九一〇年代・二〇年代日本におけるその「自己との関係」——』、『社会学評論』第43巻第4号、三七六—三八九頁、は、この問題に関連して「自己との関係」が支配システムの安定の立場からも重要であることを指摘している。
- (20) そして、そのことがおそらく、「自分を・語る・ことば」の語り手にとっては、社会運動の「制度変革」志向的側面へ参加する際の大きな動因になるものと思われる。また、「新しい社会運動」におけるいわゆる「良心的参加者」の存在を、この観点から考察することも可能であろう。すなわち、「良心的参加者」は、加害者の位置にいながら、別の観点・問題では被害者であり、ある一つの害に対して響き合うものを自己の内部に持っているがために、運動へ参加すると考えられるのである。
- (21) 田中、前掲書、二四二頁。
- (22) ここでは、こうした自己と他者との関係の変革も、「自己変革」志向に含めて考える。
- (23) これまでは、社会運動への社会心理学的アプローチ、および集合行為論アプローチなどがこの点に着目してきた。なお、塩原勉「運動論パラダイムの整備」(『組織と運動

の理論」、新曜社、一九七六年、に所収)の「社会運動の総過程」図式を参照。

(24) 女性解放運動と同性愛者の運動で、「自分を・語る・ことば」が重要な意味を持っていることは明らかである。たとえば、動くゲイとレズビアンの会編、『ゲイ・リポート』飛鳥新社、一九九二年、や、女性たちのミニコミなどに「自分を・語る・ことば」が取上げられていることに、それはよく表されている。

(25) コンシャスネス・レイジングやアサーション・トレーニングは、〈原一運動〉を意図的に組織化して運動の維持・発展に寄与せしめようという、〈原一運動〉の回路づけの意味を持つ、と考えられる。

(26) また、ネットワークキングという運動組織が持つフレキシビリティや問題への即応性なども、〈原一運動〉との関連で考察が可能であると思われる。つまり、ネットワークキングにおいては〈原一運動〉と呼べるさまざまな行為・関係が組織の關係に付随していると考えることができるのである。この問題については、今後の検討課題の一つとしたい。

(27) また、本稿で取り上げた三つの「自分を・語る・ことば」がいずれも、文筆業、すなわち「文章のプロフェッショナル」の手によることに注意したい。「自分を・語る・ことば」を、的確に、凝縮された形で表現するのは非常に難しいことであろう。ここで取り上げたような形で、万人が自己を表現できるわけではない。

(28) 江原、「リップ運動の軌跡」、一五四頁。

(29) 同論文、一三九頁。

(30) ここに取り上げた「自分を・語る・ことば」のうち、書かれた時期が早いaはともかくとして、cなどはかなり自分自身の役割を限定しているところがある。たとえば、「フェミニストの学者たちを責めるつもりはない。個人的には、学問の世界そのものに貢献しうる業績を重ねていると考えている。ただし、彼女たちの説くフェミニズムは、部分的なものにすぎないことを忘れてはならない。」「Cokie、二七」というところなどは、運動の担い手である女性の身体から遠く離れた所にあるように感じられる現在のフェミニズムの理論・分析に対する批判を投げかけ、自己の立場を明確に打ち出しながらも、「学問」としてのフェミニズムの価値を認めている。

(31) たとえば、井上芳保はフェミニズムについて、「心をつ」という経験をわれわれは普通の日常生活の中に見出しうる。(中略) そのような一人一人の実際の生活経験に根ざした、形式合理性に覆われた知性の虚しさや口先だけで心の感じられない議論の偽善性に敏感な感覚を備えた自己言及的フェミニズムが必要となっている。」と述べている。井上芳保、「ルサンチマン型フェミニズムと解放のイメージ」(江原由美子編、『フェミニズムの主張』、勁草書房、一九九二年、に所収、第四章)、一六〇頁。

(一橋大学大学院博士課程)